

# グリムの森の物語

大野寿子



私の言葉で言えばいにしえの理念、君  
[ヴィルヘルム] の言葉で言えば騎士世  
界の理念というものを、私たちの中に  
瑞々しく芽生えさせ、我々を制する慣習  
というものから解放してくれる唯一無二  
のあの時代が、今となっては森に姿を変  
えている（ヤーコブがヴィルヘルムに宛  
てた、1805年4月18日付の手紙より）

グリム兄弟（ヤーコブとヴィルヘルム）が  
1812年に収集刊行した『子どもと家庭のた  
めのメルヒェン集』には、「森（WALD）」  
を舞台とした話が多数収録されている<sup>(1)</sup>。最  
終決定版の第7版（1857年）には201話  
のメルヒェンが収録されており、森が登場す  
る話はそのうち96話、全体の半数近くを占  
める<sup>(2)</sup>。

たとえば、第15番『ヘンゼルとグレーテ  
ル』で森は、子どもたちが捨てられる場とし  
て機能し、その奥深くには、魔女の住む不思  
議なお菓子の家（原作ではパンの家）が潜む。  
第53番『白雪姫』では、継母（第1版では  
実母）の命令で、美しい白雪姫が森へ連れて  
行かれる。森の深みには、7人の親切な小人  
が住む小さな家がある。第13番『森の中の  
三人の小人』でも、森に小人が住む。彼らは、  
イチゴを摘みに来た働き者で心の綺麗な娘に

は幸運をさすけ、怠け者でよこしまな娘には  
不運をさすける運命の采配者の役割をする。

このように、グリム・メルヒェンの森は、  
あるときには、貧しい木こりや狩人に木材や  
燃料を供給し、働き者の娘や空腹の子どもた  
ちに、食料や寝所を提供する。メルヒェンの  
森が、我々の現実生活と同じようなかたちで  
登場するときは、人間と森との物質的な関わり  
が表立つ。その一方で森は、魔女、小人、  
水の精といった不思議な生き物、人の言葉を  
話す不思議な動物の住処でもある。さらに森  
は登場人物たちを、天上世界や地下世界に代  
表される非現実的世界、この世ならざる世界、  
すなわち「異界」へと誘う。奥へと進めば進  
むほど異質となっていくメルヒェンの森は、  
日常世界と異界との境界であるとともに、す  
でに異界の一部なのである。

「異界」という概念は、宗教あるいは信仰  
において、この世とは別の世界である「あの  
世」あるいは「彼岸」、すなわち、死者の住  
む「あちら側の世界」とも重なるものである。  
今のドイツの地がキリスト教に改宗する以前、  
古代ゲルマン諸民族の間で森は聖域とみなさ  
れ、神々の住まう処として崇められていた。  
自然の中に神性を見る自然信仰（樹木信仰）、  
森と人間との精神的な絆が存在していたので  
ある。また、古代ゲルマンの民は、世界とい

うものを巨木で表した。ゲルマン・北欧神話に登場する、世界樹「ユグドラシル」というトネリコの巨木がそれである。創世神話において、まずは天地が巨人の死体より作り上げられ、さらに、大地より天に向かって高く聳え立つ1本の大樹によって、世界、宇宙が象徴される。無から大地が生じ、そしてそこから果てしなく大きな樹木がそびえるまでに経過する何千何万年という時間を、ここに想像することができる。このトネリコの巨木の梢は天の上まで突き出ている。また、この巨木の三つの大きな根が木を支え、その1本は神々の住むアースガルト、もう1本は霜の巨人の住むヨツンヘイム、そして最後の1本は、霧の世界にして、死者の世界へと繋がっているとされるニブルヘイムにまで届いている。1本目の根の元にはウルドという特別神聖な泉があり、その木のそばに住まう三人の機織娘、すなわち運命の三女神が運命を紡ぎ織っている。ユグドラシルがこのように、神々の住処とも死者の世界とも繋がっているという観念は、樹木の連なる森に「あちら側の世界」との繋がりを考える考え方に通じるものがあるといえる。

ドイツの古い風習や民間信仰においては、人間の生きざまに――物理的であれ精神的であれ――「樹木」または「森」という空間が深く関わっており、その森と人間との関連性のかけらが、民間伝承に残されているといっても過言ではない。このことをおそらくグリム兄弟は熟知していた。彼らは優秀な言語学者、法学者、文学者、民俗学者、歴史学者にして大学教授であった。彼らの多岐にわたる諸研

究において探求され続けたものは、次の6つの概念に集約されると考えられる。すなわち、「ドイツ的なもの」、そして、「いにしえのもの」、さらに、「土着のもの」「自然的なもの」「詩的なもの」「ニーベルンゲン的なもの」という6つの概念である。これらの概念で表されるものをグリム兄弟は、生涯を通じて模索し続けた。その中でも特に、「ドイツ的なもの」と「いにしえのもの」が重要である。彼らは、さながら考古学者が土器の破片を発掘し修復するかのごとく、ゲルマンの古代の残滓である伝承文学（神話、伝説、メルヒェン等）の収集と保存、すなわち『グリム童話』の刊行を行なった。ということは、『グリム童話』には、グリム兄弟が、ドイツ的で、ゲルマンのいにしえの香りがすると感じたものが集められていることになり、換言すれば、そこには彼らのいにしえの理念が凝縮されていることになる。

19世紀初頭には、ナポレオン軍によるライン川左岸への侵攻により、「ドイツ国民のための神聖ローマ帝国」が崩壊する。フランス軍占領下のドイツ領邦諸国において、母語ドイツ語を話す民による統一国家が模索されたこの時期に、グリム兄弟は『グリム童話』を収集刊行している。しかし彼らが「ドイツ的」と考えるとき、未来の統一ドイツ国家を見据えていた感是否めないが、それよりも重要なものは、いにしえのゲルマンという根源的なものをそもそも模索していたのだという事実である。自分たちの時代からフランク王国時代、さらには古代ゲルマンの時代へと思いを馳せ、その時間の流れも何もかもを含めて「ドイツ

的なもの」と見なす兄弟が、同じフランク王国から枝分かれしたフランスで刊行されたメルヒェンの素材にさえ、「ドイツ的なもの」の微かな香りを感じ取ったとしても無理はない。なぜなら彼らの「ドイツ的なもの」とは、極端に愛国主義的なものでも、ドイツ至上主義的なものでもなく、むしろ、汎ヨーロッパ的であり、人間にとって素朴で普遍的なものに等しいからである。その意味での「ドイツ的なもの」と「いにしえのもの」をグリム兄弟は、先に挙げた諸研究の中で、自分たちの精神的故郷として純粋に模索し続けたのである。

ヤーコブ・グリムの膨大な研究業績の一つに『ドイツ神話学』（1835年）という、ゲルマン・北欧神話を中心とした比較神話研究書がある。これは、神話的世界観に基づいた民間慣習や儀礼の研究書でもある。その中の「寺院」の項目においてヤーコブは、ローマの歴史家タキトゥスの『ゲルマーニア』に記された森林崇拜にふれながら、自らの考えを次のように記している。

すなわち寺院とは森でもある。我々が建造され造壁された家と考えるものは、古く遡れば遡るほど、人間の手が加わっていない、自生した木々によって保護され囲まれた聖地という概念へと溶解してゆく。そこには神々が住まい、その姿は枝々のざわめく葉の間に隠れているのである。

ヤーコブはこのように、教会などの「寺院」の原形は「森」にあるという考えを明白に語っている。それはそのまま、「森」へ寄せせる思いの独白、エッセイのごとき表現となり、寺院建築、おそらくはゴシック建築について、「上方へと伸び高まろうとする森の木々の模倣を試みたのではないか」と指摘する。そしてさらに、こう語る。

風のそよぐ中、太古の森の木陰で人間の魂は、神々の支配を間近にありありと感じていたのである。

このヤーコブの見解が、グリム・メルヒェンの一語一語に隠された、あるいは託された、グリム兄弟の理念をひもとく重要な鍵となる。古代ゲルマンの民は、尊いものの気配を、「木々のざわめき」の中に感じ取り、その形姿を想像しようとした。姿かたちのない「ドイツ的なもの」あるいは「いにしえのもの」の気配を、民間伝承におけることばのざわめきの中に感じ取ったグリム兄弟は、その気配を「森」という空間に託すことを試みた。その意味において、グリム・メルヒェンの森は、古の人々と森との関係、すなわち、古の人々の森への思念を今に伝えるものであるだけではなく、グリム兄弟の「根源を追い求める」という精神が結晶化した「理念の森」なのである。

.....

\*本論稿は、独立行政法人日本万国博覧会記念機構  
自立した森再生センター発行、財団法人千里文  
化財団制作「森・発見」第3号に掲載した「グリ  
ム兄弟におけるメルヒエンの森」(2-6頁)に、  
加筆訂正を施したものである。

〈注〉

(1) よく耳にする「メルヘン」という語は、ドイツ  
語の Märchen から来ており、「メルヒエン」と  
いう表記の方が原語の発音に近い。もともとは  
「短いお話」、「短い報告」という意味の  
Märchen は、「童話」、「おとぎ話」、「民話」、「昔  
話」、ときには「笑話」や「寓話」などをも幅広

く指し示す。つまり、「メルヒエン」=「童話」  
というわけではなく、「子どものためのメルヒエ  
ン (=お話)」だから「童話」なのである。

(2) 巻末に収録されている「子どものための聖人伝」  
10話を合わせると、全211話中101話に森が  
登場することになる。